

幼稚園教育指導書

「自然編」を読んで

太田次郎

このたび文部省から幼稚園教育指導書の自然編が発表された。

この書のまえがきには、「幼稚園教育要領に基いて、幼稚園の目的や目標を達成するための望ましい経験を、指導計画を立案するための便宜から、6領域に分類して示し、自然はその一つである。」と述べられている。筆者はかねがねたとえ便宜上からでも、幼稚園教育をこのような領域別に分けることに疑問を有していたし、このような分け方がへたをすれば、幼児の発達を無視した知識の詰め込み方式に陥らせるおそれを感じていた。そして今回発表されたこの指導書を読んでまず感じたのは、筆者のおそれがもはや現実の問題として起りつつあるということである。いろいろな断わり書きはあるにしても、本書はかくれみのを着た「幼稚園の理科」であると認めざるを得ない。どうしてこのようになるかは後述するが、さらに悪いことには仮りに教科別を認める立場に立つにしても、その内容は科学性の芽ばえをつちかうというには余り

にもずさんで、拙速主義的に作られたものと思われる。筆者は先に本誌（五十九巻十号）に科学教育の拙速主義が幼児教育の領域に持ちこまれるおそれを記したが、残念ながら本書によって、この点も表面化したと感ぜられる。このように結論的なことを述べるには、まず事例をあげて論証すべきはいうまでもない。しかし、本書の影響が及ぼす大きさを考えて、あえて初めから激しい言辞を使わなければならぬと感じたわけである。

まず第一にあげた本書はいわば「幼稚園の理科」ともいえるという点について、おそらく本書を編集した人々から「それは筆者の曲解で、独断であり、良く読めば各所にその点の注意がなされている。」といわれるに違いない。なるほど、自然の指導の重要性について述べた節でも、豊かな人間性を養うことが第一にあげられている。また、自然の指導の位置のところでは、「特にこの指導書が領域別に作成されていることから、自然の指導がひとつ

の独立した教科であるような誤解を受けやすいけれども、幼稚園の教育課程は、小学校の場合のように『いまは自然の時間でですよ』と云って指導するような分化した構造をもったものではない。……』と記されている。しかし、この文のすぐ次のページには、「自然の指導が小学校の教育とどのような関連をもつか、教育系統のたてのつながりを考えなければならぬ。」「幼稚園教育の成果がどのようにして小学校教育の素地となることができるかを考えよ。」などと述べてあり、「幼稚園で養った科学性の芽ばえなどがすなおに伸びて、小学校で花を開き実を結ぶように留意しなければならぬ。」と結んでいる。もちろん、観念的には、以上二つの点が必ずしも矛盾するとはいえない。しかし、実際に指導計画を立案する場合、個々の先生がどうしたら良いか迷われることが多いのではないだろうか。

おそらくこうしたことを本書の編集において考えられたのであろうか。続いて「自然の指導における教師の態度について」の節があげられている。この節では、冒頭に「自然の指導では教師に科学的態度や能力が備わっていることが期待される。」とあり、次に「事実の観察・実験から科学的知識を体系的に把握する心がけ」が述べられている。誠に結構すくめで、一見反論する余地もないようにみえる。しかし、肝心なのは、おそらく心がけを説くこと

ではなく、「実際にあたってどうすれば良いのか。」ということであらう。この点について、本書では、「チューリップの花の観察から、花のつくり、ほかの花との比較、つばみから花が咲き、さらに種子ができること、水をやらないと弱ってくること」などを知らせるような例があがっている。いったいチューリップの花を見た体験から、これだけの知識を自然に導かれて得るように發展する幼児がいるであろうか。おそらくこのように知らせようとすれば、相当な知識のつめ込みとならざるを得ないであろう。さらに、たとえこのようなことを知り得ても何になるのであろう。花のつくりや種子ができるのを教える目的は、生物学的には、生物の種属維持の観点からなされるべきと思われる。しかし、チューリップには、品種が多く、花のつくりを説明する材料としては決して良いものではない。したがって、中学一年の理科で花のつくりを学ぶ場合にも、アブラナ・サクラ・アヤマなどほどの教科書でもとり上げられているが、チューリップを例にしているのはない。さらに、チューリップが種子でふえないで、球根（正確には鱗茎）でふえることはいうまでもない。このように考えると、指導書にあるチューリップの例はまったく無意味、または不適当といえる。まして、ほかの花と比べて花のつくりの違いに気づかせるといえるのは、幼児には余りに無理な期待であらう。こうして、

自然の指導における教師の態度の節は、単なる常識的な心がけのみを述べたもので、「それでは、先生は何をしたらよいか」ということについて何の指針も与えていないと思われる。つまり、表面は教科別ではないと説かれている指導書の方針と、小学校の理科との関連を考えようという方針とを矛盾なく両立させる手段は示されていないということが出来る。そして、後に記されている指導目標と指導内容についても、雑多な知識のつめこみをきけようとする努力が余りにもなされていないようである。

次に、第二の、内容がずさんで、拙速主義的に作られたものではないかという点を論じてみる。まず、前述のチューリップの例はこれにもあてはまることは明らかである。さらに、指導内容をみると、いろいろな例をあげることが出来る。たとえば、動植物をいたわる項やその他の随所にみられるのは、「植物について水をやることの重要性」である。この点は、おもな施設・設備・用具の項に水栽培がとりあげられていることにもあらわれている。しかし、植物の成育に必要なのは、いうまでもなく水だけではない。むしろ、近年の生物学では光の重要性が第一にあげられている。このことはともかくとしても、水栽培がどうしてこんなにとり上げられるのか、（これはこの指導書だけでなく、小学校の理科でも同様であるが）、理解できない。なぜなら、ふつうの水栽培（高校で

扱う水耕法は別問題である）ができる植物はヒヤシンス・クロッカスなどごく限られたものである。しかもそのような植物はいずれも球根（鱗茎）に養分をたくわえているから水を与えるだけで花が開くのである。この点、球根を割ってみると、すでにつぼみができていることでわかる。しかし、幼児や小学生に教材として用いれば、まず「植物はすべて水だけで育ち、花が開く」と理解するであろう。暗いところへおくと成育が良くないことから、光の重要性を理解させることができても、植物の成育に必要な根からの養分の吸収は必要がないと誤解させるおそれは十分である。

このほかにも、不適当な例はきりがなほ多い。指導の要点の事例としてあげられている「しゃぼん玉遊び」であるが、これといった何の科学的知識が与えられるであろうか。「木の葉や花にかけると枯れてしまうことを話す。」ということがあげられているが、何もしゃぼん玉でこんなことを説明する必要はないであろう。「動植物をいたわる」という例かもしれないがこれもまじめに論ずる問題にはならない。また、「大きい玉や小さい玉をふくにはどうしたらよいかを考えさせたり、くふうさせたりする。」というのも、5才児には無理なことと思われる。ついでにあげれば、ここので使われている「ライオン」というのは商品名ではないか。準備のところには中性洗剤とあるが、この点なども拙速主義の極致と

思われる。

なお、指導内容について、この指導書では地域差などについての考慮が少な過ぎるようである。先月の某全国新聞の投書欄で、「子どもがどんぐりを拾いにいきたいというのが、どこへいけばよいのか」という主旨の文を読んだ記憶がある。現在の都会地の幼稚園(特に今後団地や集団住宅の増加は当然考えられる)にとつて、どんぐり拾いはもとより、本書にあげられた指導内容の中で、実施できないものが非常に多いであろう。まして、おもな施設・設備の項にある雑草園・野菜園・飼育小舎・飼育池・飼育箱のすべてを設備し、その中にあげられている多数の動植物を成育することが可能な幼稚園はほとんどないと思われる。どうしてこうなつたかを邪推すれば本書の編者の人々は、虫や鳥の声・どんぐり・しゃぼん玉・おたまじゃくしなど古くからいわれている「自然に親しめ」的な甘い考えで、しかもこういう教材が幼児の科学的教育に最も良いと無批判に考えたのではなからうか。筆者は、たびたび述べるように無理に科学教育を考えなくてもよいと思うので、そんなことより、つみ木の材料を工夫したりする方が良くはないかと思う。また、科学教育を急ぎたいならば、雑多な生物学的知識をつめこむより、もっと物理的な知識を得られるようにくふうした方がよいのではないか。今、筆者の専門の生物学でも、

コン虫採集や植物採集、動植物の名前や構造や生態を無秩序に教えこむことの反省が盛んになり、激しい論争さえ生じている。自然を観察し、古い教育体系の知識を子どもにつめこむことが科学教育であるとしたら、いつまでも真の科学的知識は得られないであろう。

以上、今回発表された指導書について、ざつと批判してみた。

しかし、批判のみで終らせたくはない。そこで、文部省は今一度、専門の学者を集め、幼稚園教育を領域別に分けることの可否について検討することが望ましい。さらに、どうしても科学教育をしたいと考えるならば、本書のような十分な内容でないものを作るために、時間をかけて研究すべきと思う。この場合、幼児が遊びながら、自然にくふうし、科学性の芽ばえを得られるような教材の研究を、古い觀念にとらわれずになすべきと思う。

最後に、幼稚園の先生方には、本書の内容をそのまま実行することが知識の雑多なつめこみに陥るおそれの多いことを理解され、幼児の発達にそつた指導をされるよう望みたい。

(お茶の水女子大学理学部生物学科助教)

× × ×

× × ×